

2019年6月9日

立教大学国際学術研究交流制度  
2019年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	文学部・教授
	氏名	加藤 磨珠枝
受入学部・研究科・研究所		キリスト教学研究科
招へい 研究員	所属・職	full Professor, Department of Literature, Arts and Social Sciences, University "Gabriele D'Annunzio" of Chieti-Pescara 所属機関所在国：イタリア
	氏名	Alessandro Tomei
招へい期間		2019年5月23日～2019年6月2日（11日間）
研究経費		372,790円

2. 滞在中の活動

来日および離日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

\*「本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動」を行った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

年月日	活動内容
2019年5月23日	来日
5月25日	公開講演会「ジョット・ディ・ボンドーネ——中世後期のイタリア絵画における新たな光（Giotto di Bondone: new light in the Italian painting of the Late Middle Age）」を14号館D301教室にて開催。学内外から50名程度の参加者。
5月29日	駐日イタリア大使館の文化部・一等書記官マルコ・ラッタンツィ氏を、受入教員と共に表敬訪問。
5月30日	駐日イタリア大使館開催「共和国建国記念日」パーティに受入教員とともに出席。
5月31日	ワークショップ「中世美術における古代（The Antique in Medieval Art）」を10号館X102教室にて開催し、研究指導。学内中心に25名程度の参加者。
6月2日	帰国

### 3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

5月25日（土）に開催された公開講演会では、トメイ氏により中世末期の画家ジョット（1267年頃 - 1337年没）の作品群について年代順に詳細な分析が行われ、画家の様式形成に関して大系的な考察がなされた。そこでは、まず、ダンテの『神曲』（煉獄篇）やボッカッチョ『デカメロン』（第6日第5話）、ジョルジョ・ヴァザーリ『美術家列伝』によって語られるジョット神話の生成について論じられ、続いて彼の署名の入った基準作となる3枚の板絵の解説。その後は13世紀末に彼が受注したアッシジのサン・フランチェスコ聖堂上堂の「聖フランチェスコ伝」壁画の空間表現と人物の特徴を確認後、同聖堂内でジョット関与の可能性が指摘されている右身廊壁「イサク伝」壁画との様式比較がなされた。

トメイ氏によれば、これまで美術史家の間で議論となった「イサクの画家」はジョットではなく、彼よりも前時代のローマ絵画の影響下にある別の画家であるとの検証がなされた。と同時に、ジョットが当時のローマ絵画から多くの点を学びつつ、新時代の絵画表現を切り拓いたプロセスが、その他の作品群（《荘厳の聖母》1310年頃作、ウフィッツィ美術館所蔵、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の《磔刑図》1312年作等）、パドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂壁画（1304-06年頃）の考察とともに論じられた。史料によれば、画家は実際に都市ローマに招かれ、滞在・制作したことが知られている。1300年の聖年祝典用にラテラノ教皇宮殿のロジヤ壁画、ヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂の《ナヴィチェッラ》モザイク、《ステファネスキの三連祭壇画》他を手がけた。晩年のナポリ、ボローニャ、フィレンツェでの制作に関しても、研究の現状と近年の成果がきわめて丁寧に解説され、高い学術性を有するプログラムとなった。

本講演会には学内外の美術史研究者をはじめ、学生、院生、一般も含め、幅広い層の聴衆が集まり、多くの参加者からの質疑応答に応える形式で活発な議論が行なわれた。この機会を通じて、今後の日本の中世イタリア美術研究に大きな教育効果が期待される。その後のミニ・レセプションも和気藹々とした雰囲気でも好評を博した（添付写真参照）。

5月31日のワークショップは、通訳を介さずすべて英語での発表を行なった。トメイ氏の発表“The Antique in Roman Painting of the 13<sup>th</sup> century”に加え、大野松彦氏（立教大学兼任講師）も関連テーマ“The Antique in the Apocalypse Art: Some Remarks on Majestas Domini”で報告を行い、全体テーマ「中世美術における古代」の諸相を考える貴重な機会となった。金曜夜の遅い時間ではあったが、本学および他大学の学生、大学院生、教員も積極的に参加してテーマについて論じ、有意義な時間を過ごした。

上記二つのプログラムによって、イタリアと日本の学術的な国際交流が実現したことは確かであり、また国内の研究者に対して、本学の研究機関、教育機関としての意義を伝える機会ともなった。加えて、5月29日、30日と二日連続で駐日イタリア大使館員もまじえたミーティングを行い、今後の日伊文化交流の新たな計画についても話し合った。その詳細は、来年度以降に公表の予定。

<5月25日公開講演会の様子>



<公開講演会レセプションの様子>

